

『再会の朝の食卓』ヨハネ21:1-14

21:1 そののち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。

21:2 シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼバダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。

21:3 シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くのだ」と言うと、彼らは「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。

21:4 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。

21:5 イエスは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。

21:6 すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。

21:7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとって海にとびこんだ。

21:8 しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚のはいっている網を引きながら帰って行った。陸からはあまり遠くない五十間ほどの所にいたからである。

21:9 彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。

21:10 イエスは彼らに言われた、「今とった魚を少し持ってきてなさい」。

21:11 シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百五十三びきの大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた。

21:12 イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。

21:13 イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた。

21:14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

●序論

恵まれた集会の後、一緒に行った青年から聞いた言葉

「このまま家に帰るがこわい」と。

彼曰く、そういう集会に参加して帰って経験する思いだということです。

「祭りのあと症候群」：非日常から日常に戻るときに、急激に落ち込む。無気力になったような心境に陥ることをいう。つまり、人の心には「反動」があるということです。

聖書の中では、喜びと感動の復活のイエスさまとの再会体験を描いて、これらのことは

すべて、あなたがたが信じるために書いたのだと締めくくっている…というところで、古い映画なら、最後にENDマークがつくような終わりだと思います。

ただ最近の映画の中のいくつかには、エンドロールが終わった最後の最後に、ふっと余韻を残すような物語が、加えられていることがあります。

今日の物語もそのような将来を垣間見せる物語…なのかも。

21:1 そののち、イエスはテベリヤの海で、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。

●本論

I. 弟子たちの気持ちを追体験する

弟子たちは、「テベリヤの海辺」つまりガリラヤ湖畔・・・

そこで描かれる弟子たちの姿は、手持無沙汰で退屈した様子さえ感じられるありさまで描かれています。

復活のイエスさまとの出会いで喜び、感動を経験した弟子たちのはずです。

ヨハネは、その時の心があるのままわかるような、ありさまで、ここで描いています。

それは、先ほど紹介した「祭りのあと症候群」のような、心の穴を抱えたようなありさまだったのかもしれない。

イエスさまは確かに復活された、わたしたちの前に現れた。わたしたちに語りかけてくださった。とてもうれしかった。感動した、感謝した、喜んだ…と。

でも、…だから、自分はもう変わった、大丈夫だ…などとは言えない、心の穴を、彼らは抱えていたのです。自分は弱いまま、あの十字架の前でイエスさまを見す捨ててにげた時と、何も変わっていない…という風に。

そんな中ペテロと弟子たちが漁にでるくだりがあります。

:3 (LB) 「漁に行くぞ」とシモン・ペテロが言いました。するとみんな、「それじゃあ、おれたちも」というわけで、そろって出かけました。小舟に乗り込み、漁が始まりました。ところが一晩中かかっても、小さな魚一匹とれません。

漁は、元漁師のペテロたちでしたが、自分の能力とスキルを活かせる、得意分野でさえ成果を得られないでいました。彼らの心はどんなだったのでしょうか？

けれども実は、そういうありさまを静かに、近くに立って見ていてくださるイエスさまがいてくださったのです。

21:4-5 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。イエスは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。

近くに復活のイエスさまがおられることで、物語は温かな朝の光の中にすすむのです。

II. 弟子たちの再体験を見る

21:6 すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見な

さい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。

ヨハネはペテロと自分たちが、あのガリラヤ湖畔で、イエスさまから弟子としての招きを受けたことの経験があります。（マタイ参照4:19）

そこにイエスさまの御声があったということです。それをいち早く思い起こしたのは、ヨハネだったのでしょう。

21:7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとって海にとびこんだ。

ああ、あんなにその声を聞きたいと思っていたはずなのに、いざことが起こって、だれかに言われないと気づけないでいる鈍さがあるかもしれません。

そんなわたしたちに、イエスさまは岸辺からまなざしを向けて、御声をかけてくださる。それがわたしたちも知るべき日常の御言葉体験、普段のこの礼拝での体験であっていただきたいと願います。

Ⅲ. イエスさまの食卓を追体験する

21:9-10 彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。イエスは彼らに言われた、「今とった魚を少し持ってきてなさい」。

この後ペテロが網を引き揚げてわかったのは、135匹もの大きな魚を捕ることができていたということでした。

それよりもさらに気になるのは、先に「子たちよ、何か食べるものがあるか」と問うていたイエスさまが、そこに朝の食卓を備えていてくださったことです。

21:12 イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。

ここにイエスさまと共にいることのできる「恵みの招き」を聞く思いがします。自分が、何もできていなくて、何も持てていなくても、いやむしろ失敗をしていて、その失敗したままの弱さや欠けを今も抱えていても…、そんな弟子たちやわたしたちをこの朝、食卓に招いてくださっている…ということです。

この霊的な食卓に、つまり礼拝への招きを重ねてみることができます。この続きにはこうありました。

:12-13 …弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた。

湖の岸辺で、柔らかな朝日を感じながら、イエスさまの備えてくださった恵みの食卓にあずかることができる。イエスさまが下さる食事をいただいでいくのです。

●さいごに)

:12…弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。

わたしたちは、ここに静かな朝の食卓の情景を見えています。ざわつくような弟子たちの姿も雑音也没有ありません。

もうそばにいるのは、主イエスさまであるとわかっていたので、それだけで十分な安心を感じ、感謝と平安がそこにあるのです。

それがまた礼拝のありさです。ここに確かいイエスさまがいる安心です。

先日の聖会で、病の幾人かの人にこう告げられていました。あなたの問題は足ではない、腰ではない。問題はあなたの心にある…、それが癒されるとき、その痛みも癒される…というような内容でした。

与えられた招きと言葉を聴き取り、さらにこれから日常にもどるとき、礼拝生活が祝福されますようにと祈るのです。主にある日々の礼拝生活が、所属する教会での礼拝が、神さま体験が、主にあって守られますように。

ヨハネはその手紙で、この主にあって祝福している、その言葉を最後に紹介しましょう。

3ヨハネ1:2 愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている。

わたしたちにとって大切なのは、いつでもイエスさまによって恵まれていることです。